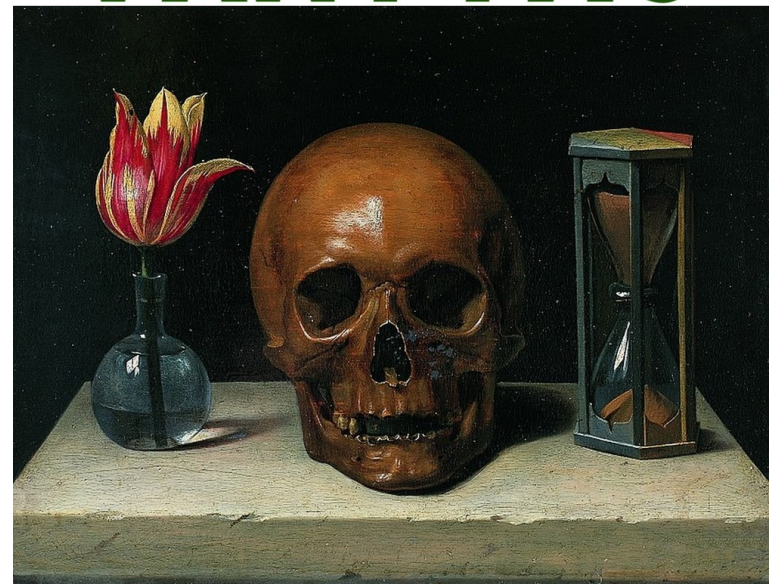


# VANITAS



## 小説「VANITAS」

2025年書き納め作品

作 飛鳥世一

本書は2025年11月25日よりの不定期連載  
2025年12月29日書き上げ作品となります

# 目次

はじめに	1
第一章 萌芽	2
第二章 混迷	9
第三章 起動	24

## はじめに

令和七年もあと一か月ほどとなりました。  
ほぼほぼ書けない一年でしたが、どうしたことかここに来て書く気が漲りはじめ、連日着想、下書き、書き直し、書き上げと時間を使いはじめの始末。  
個人的にはオモシロイ一年でしたねえ。  
手術や入院そしてリハビリ、激やせ……筋力トレーニング。  
そしてクダラナイ駄文書きに明け暮れる日々。  
結局小説作品で書き上げることが出来たのは、ショートショート一本とこの VANISTA と「七日」だけとなるのでしょうか。

ただ、いつの間にか作品一つ一つのダウンロードも200名のあなた様を数えるまでになり、何とお礼を申し上げて良いのやら、大いなる感動を頂戴しております。  
精々皆様お一人お一人に笑って頂いたり、怒って頂いたり、考えて頂ける作品づくりが出来よう研鑽を積んで参りたいと存じます。

今回の小説「VANITAS」は社会問題の一つの側面を私流に現代調に作品としたものです。  
どう考えられても良いのですが、トドノツマリはそれぞれのポジション取りが世の中を佳くして行く一つの契機。どのようなポジションに脚を定めるべきか考える切っ掛けになれば嬉しいのですが。  
多分ね、こういう臨場感を取っ散らかった人間にしか出せないと思うのだから。

そういう意味でも書くことへの責任が機能した一作カモしれません。  
どうかお楽しみいただきますよう。

そして、不定期連載にしてごめんなさい。

多分、書きながらどんどん膨れ上がりそうな作品になりそうだわ(笑)

ここから一か月。

どうか宜しくお付き合いのほどお願い申し上げます。

令和七年十一月 吉日

飛鳥世一 拝

## 第一章 萌芽

上野は国立西洋美術館の前庭。松原隆二の脚はとまっていた。オーギュストロダン作「地獄の門」の前だった。高さ5.4m幅3.9m重さ約7トンのブロンズ彫刻は1933年の完成である。

【確か世界で7カ所ほどあったはずだが……それにしても、何故、日本に2カ所もの地獄の門を作る必要があったものか。まあ、静岡県立美術館はロダン作品に特化した美術館でもあるからして然もありなしという按配に留め置くことは簡単なのだが。それにしても……】隆二の眼は国立西洋美術館正面前入り口に掲げられたポスターを見やった。そこには『Vanitas と ふうもつ 一つの真理』世界の Vanitas を一堂に集めて』と銘がうたれていた。

隆二は僅かのあいだ肺に溜めたタバコの煙を細く細く、尾を繋ぎ止めるように吐き出してみせた。静かに、懐かしむように、紫煙と上野の森の空気を混合させ乍ら。目は、鉛色の東京の空へと移したまま見上げたきり動かなかった。無表情のまま。観る者にはそれは差乍らブロンズのようにも映っただろう。

「上野か……」昔、上野、金儲け……導き出された答えは、イラン人という人達であり、偽造テレホンカードが彼らの収入源だった時代であったことを思い出していた。

「地獄の沙汰も金次第……、さしづめ地獄の門も金次第で開いたり閉じたりか。風俗姉ちゃんの股の下じゃねえっんだよ、ねえ、考える人よ」隆二は薄い笑みを滲ませるとワザとらしく下卑た言葉にしてみ

せた。人間によっては畏まった場所であり環境に身を置くと妙に悪ぶってみたいくなる性質をみせる者もいるのだが、隆二もこのタイプに属していたのかもしれない。

ロダンは、「考える人」をPoète（詩人・フランス語）と名付けていた。ロダンは「詩人」と名付けている。ロダンは何故、詩人と名付けたのか。

地獄の門のファサード付近に設えられたPoèteは後にそれだが鑄造され現在の「考える人」となっている。

フロレンス（フィレンツェ）出身の詩人であり、哲学者として活躍したダンテによる「神曲」地獄篇第三は名高い。

我を過ぐれば憂ひの都あり、

我を過ぐれば永遠の苦患あり、

我過ぐれば滅亡の民あり

義は尊きわが造り主を動かし、

聖なる威力、比類なき智慧、

第一の愛、我を造れり

永遠の物のほか物として我よりさきに

造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、

汝等こゝに入るもの一切の望みを棄てよ

「神曲」岩波文庫 山川丙三郎氏 訳

ダンテには、子供のころから密かに心に秘めた女性がいた。それがベアトリーチェだった。がダンテの恋は実りを得ることなく、双方ともに別な伴侶を得ている。その後ベアトリーチェは24才という若さで、病のためこの世を去っている。ベアトリーチェの死報に触れたダンテは半狂乱となり悲嘆に暮れたと伝わっている。

後にダンテが生涯をかけて産み落としたのが「神曲」ということであり、地獄の門なのだが、ダンテの憂鬱質がどれほどのものであったか分かうという史実である。

「考える人」は、ダンテが密かに永遠の愛を誓った、ベアトリーチェの余りにも若すぎる死に触れ打ちひしがれたダンテそのものを顕しているだろうことが想像に容易く、「詩人」と名付けたロダンのダンテへのオマージュと眺めることが相応しい……隆二はそう考えていた。地獄の門、憂いの都は、ダンテにとってのそれだったのだろう。

「まあ Vanitas をやるのであれば、日本でここより相応しい美術館は無いということか……」隆二はそう言葉にするとここで二本目の煙草に火をつけた。



2013年春、隆二のもとにひとつのニュースが齎された。それは思いのほか大事となりそうな気配を孕んでいた。

「バカが。だから生兵法は怪我のもとと云う。しっかりとした勉強をしていないことを自ら晒したに過ぎまい。だからゼロを学ばなければならないのに。それにしても……この芽は摘んでおかなくば寧ろ対岸の火事では済まなくなるかもしれないわなあ……どう動くか」隆二はパソコンのメールを閉じるとそう呟いていた。

時は福田内閣の折(2008年)にはじまったASEAN諸国の経済的且つ社会的資源でもあるところのイスラム法・シャリアに基づく「ハラール」をはじめとする東南アジアのイスラム市場への取り組みがスタートした黎明期でもあった。

2008年当時、日本はまだ東南アジアのイスラム市場向け輸出市場のロジックを調査研究する方向へと舵を切っていた。この時に中核的ポジションを担った国がマレーシアだった。華僑系とプミトラ系統(現地人)の自国民が混在する社会を形成していたマレーシアだったが、確かなイスラム社会が形成され社会基盤もイスラム法が機能しており、ハラールに関するガバナンスも JAKIM(マレーシア連邦政府総理府イスラム開発庁)によって厳格に管理されていた。

福田内閣より特命を受けた内閣官房参与の〇〇氏(後に・岡山県庁に出身)と某大学の教授〇〇氏のチームによる、輸出市場むけのロジック構築と制度化への取り組みがはじまったのである。

日本という国が「宗教」を市場化した画期的な夜明けでもあった。

後に農林水産省と経済産業省が軸となり、マレーシアをはじめとするASEAN諸国のイスラム市場向け輸出事業がスタートすることとなるのだが、先にも触れたように、たった二人の優秀な特命チームの活躍はもう一度触れておかなければならないだろう。同時にこの二人の活躍を補佐したのが国際機関であるところのJETRO(日本貿易振興機構)とJICA(独立行政法人国際協力機構)だった。

# ASEAN-China Free Trade Agreement



AC-FTA

ASEAN Member Countries



域内ムスリム人口  
27300万人

2010年1月  
発効

域内人口19億人  
名目GDP 約6兆ドル

後にこれらへの取り組みが契機となり、今日のTPP（環太平洋経済連携協定）への発展と礎となるのだがここでは割愛する。

が、日本には急がなければならない事情があった。TPP（環太平洋経済連携協定）という大きな枠組みを構築する上での事情。

それが、右図に示されたACFTA、ASEAN、中国自由貿易協定。中国主導で進められた協定の取り組みの発行が迫っていた。域内2億7千3百万人のムスリム巨大市場を抱えたASEANと中国の枠組み。当時、中国にしても新疆ウイグル自治区を中心としたイスラム社会が形成されており、イスラム社会資源も相応に有していた中国は、ACFTAを通じ経済的側面からイスラム社会資源へのコミットを果たそうとしていた。

結果、ACFTAは2010年1月に発行を迎えた。日本は数カ月ほど遅れてマレーシアをはじめとするイスラム市場へのハラル資源の輸出事業が開始されることになるのだが、2年という短い期間でこのロジックをまとめ上げた一足たちの活躍は、今日の日本経済を下支えする大いなる功績の一つだったと言えるだろう。

中国はその後、新疆ウイグル自治区のイスラム系自治区民に対する帰属や人権をめぐる侵害行為を行ったことから国際社会（欧米中心）よりジェノサイド認定を受け批難を受けるに至っている。

隆二のもとに齎された報はメタが運営するSNSによって次のように記されていたのである。

「お疲れ様です。いやあんでもないのが出てきましたよ。まあ、前々から問題ありの人物だったのですがね、ヤッコさんやっちまいましたね。国内の在日ムスリムの人達を捉まえて、コンバートムスリムが偉そうなことを言ってるな」とやったらいいんですわ。そしたらムスリムの人たちが怒りだしちゃいまして、もう、上へ下への大騒ぎです。これは拙いでしょう。あいつ、しっかり勉強もせずにムスリムフレンドリーの旗振り役もしてましたからね。これじゃあ冷や水浴びせたようなものですわ」という隆二の関係者からのものだった。

ここで云うところの「コンバートムスリム」とは、俗にいう処の「改宗組」のことである。要は日本国内に住み、日本人として仏教や神道に帰依信仰していた者たちが、イスラム教への信仰の誓いを立てた者たちを意味指しているのである。

本来、この言葉自体が「ムスリム」間で非公式な場面において使われる言葉であり、この信仰を持たない立場の人間が使うことにはムスリムサイドによるアレルギーも伴っていた。

従って、ムスリムでもない人間が同胞を指して「コンバートムスリム」と揶揄するなど以てのほかであったのだ。

隆二による「バカが。だから生兵法は怪我のもとと云う……どう動くか」という独り言は当然と言えば当然のものであった。

「まずは、事実関係だけは確認しておかなければなるまいな」そう口にする隆二はメタに登録されている関係先へと事実関係の把握にむけての送信に着手し始めていた。

■

遡ること一年前の2012年12月のある日のこと。隆二の妹は東京の某大学で開催された観光系の学会の登壇者としてマイクの前に立っていた。インバウンド市場における「信仰」を持った人々を市場化する上での取り組み。所謂イスラム教徒・ムスリムたちを日本に呼び込むうえでの策についての講演だった。

「……さて、ということ、所謂日本流の観光客向けの釣言葉である『非日常』を切り口とすることの合理性を見出すことは出来ない」と知っておかれるべきでしょう。何度も言うようですが、彼らにとっての旅は日常の延長線にあることが相応しく、寧ろ日常を守ることが宗教上のシャリア、イスラム法に通じてきます。同時に、教義戒律への遵守姿勢についても個々人によって変わってきます。ともすると厳格、寛容などという言葉で信仰の姿勢を表現することもありがちですが、入り口として押さえておくべきは、この様な主観的考え方は取り除いておかれるべきでしょう。信仰は何処まで行っても個々人のものですから、外部の人間がそれに対し、寛容、厳格という判断は慎む必要があります」

「では、具体的にどうすれば良いのかという疑問が湧いてくるでしょう。単純です。今のところ日本は、徹底的な情報開示姿勢に徹するだけです。寧ろ、今の日本にはこれしか出来ません。2010年よりASEANを主とするイスラム市場向けへの輸出事業は〇〇先生達の活躍により、制度の設計が進み、農水、経産の主導で始まりましたが、これはアウトバウンドです。即ち、ハンドリングの主権者は輸入元に在りますから寧ろ日本はそれに倣うことが当然なわけです。しかし、インバウンドの主権者は受入国、ホスト国の日本です。現時点において日本にはそのための資源は限定的です。従って、日本は資源造成と現有資源の情報開示という前後輪を動かす取り組みが必要となるのです……」

九十分の公演は30名ほどの学会員で埋まっていた。参加者は実業系会員が多かったようだ。隆二の講演が終るとゲストコメンテーターの影山が司会者から指名を受け、コメントを口にした。

「仰ることがとてもわかりやすく、新たな市場としてこれから注目を集めることになるのでしょうか、現在までのところは資源の充実という観点からも時期尚早と云いますか、まだ早いのかなというのが率直な感想でした……」とやった。後にこの影山が隆二の運営する研究所に合流することになるなど、この時は考えもなかったのである。



ただ、講演会場の反応は、概ね影山が言葉にしたようなものであり、隆二は先の予見できない観光学の専門家たちへの苛立ちを深めたのだった。

【たった数年ですら予見できずか、これでは人も育つまい。観光学自体が萌芽と云えば萌芽。実業系の都合が優先されているのだろう】隆二の中では5年先を予見できない専門家は専門家に非ずとしていたことから、然もありませんということではあったようだ。

隆二の講演からほんの数日後のこと。メタを通じた関係者からのメールが隆二のもとに配信された。

「大変です。観光庁が来年度の重点取り組み地域にASEANのムスリム市場と打ちだしました」理事長、これ知っていたのですか。そして、ついでには2013年2月に観光庁主催でムスリムインバウンドセミナーを開催するから仔細確認の上応募してくれて出ていますよ」と記されていた。

ついに来たか。隆二は震えていた。それにしてもなんとというタイミングだろう。

風が吹き始めていることを実感していた。

つい先日、学術系の学会で話したことが国の制度政策上の重点施策として制度化されるのである。ここまで丸々2年。一人閉じこもり朝から晩までムスリムとイスラム教、そして世界の宗教を取り巻くインバウンド環境について勉強してきたことが小さな花をつけはじめたのであった。

観光庁のホームページへ飛び隆二は内容を確認すると次のように記されていた。

『日・ASEAN友好協力40周年記念事業として、ムスリム訪日旅行者を受け入れる環境整備や受入サービスの提供などに関心のある関係者を対象に、東南アジアのムスリム市場に特化したセミナーを開催いたします。』

注目される同市場の現状と日本国内において先進的にムスリム旅行者の受け入れに取り組んでいる事例等を紹介することで、各地域における受入環境の整備促進や、飲食・宿泊などの各種施設における関連サービスの充実を期待しております。』

日本でアウトバウンド・ハラルへの調査研究がはじまってから5年。

当該市場を輸出市場として見据えた国の取り組みがスタートして2年。

「そして来年……ついに日本は宗教への取り組みを実現化する。にいぼんのお夜明けぜよ！」

隆二は言葉に出して叫んでいた。

## 第二章 混迷

2012年12月、国土交通省・観光庁からリリースされた「ムスリムインバウンドセミナー」は一瞬のうちにその席は予約で埋まっていた。隆二も何度か観光庁への問い合わせをはじめ関係者からのネゴも入れてはみたものの席をとるには至らなかった。

明けて2013年の2月。日本ではじめてのこととなる、イスラム教徒をインバウンドゲストとして市場化するためのセミナーが国主導のもと開催されたのだった。登壇者には北海道でリゾートホテルを運営するK観光。京都で有名老舗京料理店を営む京料理Mらの経営幹部が顔をそろえていたと伝わる。後に隆二は参加した関係者からその時の詳細を聴くに至っていた。

「想った通りと云いますか……、観光庁もこの市場に取り組む難しさを改めて知ったでしょうね。」

「なに〜なになに、早く聞かせてよ〜なんかあったの?」

「遣っちゃったんですよ。登壇者が。質疑応答の時。質問者はムスリムでした。」

「うんうん。それで?」

「お話の中で、イスラム教徒にも教義戒律に厳格な人や緩い人がいる〜ということでしたがどうゆうことですか、あなたはムスリムですか?……と聞いたわけです。まあ、違いますと答えた訳ですが……間髪入れずですよ。ムスリムでもないあなたに厳格とか緩いとかどうして判断が出来るのですか〜とやったわけです。もう止まりませんでしたよ暫く」隆二に情報を齎してくれた関係者はそう仔細を告げた。

「それを言ったのは日本人?」

「違いますね〜多分ASEANのどこかの国の日本在住者でしょうね。どうも認証団体かモスクに関係しているんじゃないですかね」

「有り得るね。国内の認証団体にとっても千載一隅の商機だかね。日本は認証団体にとっては最後の樂園であることは間違いないもの。しかし、キッチリとした勉強をしていないというのは恐ろしいねえ、登壇者にしたら半分受け狙いみたいなリップサービスの思ひもあったのだろうけど、しかし、日本人は宗教音痴だよな」

「いや、本当ですよ。質問したムスリムの立場に立ったなら、ムスリムでもない、イスラム教徒でもない日本の商人たちが、ムスリムのおもてなしについて喋るということがそもそも面白くない(笑)まあ、これも当然と言えば当然でしょう」それではまた〜という言葉を残すと隆二は電話を置いた。

【早速か。これで観光庁さんも市場開拓の方向性については再度の煮詰め直しが必要になったということだろう。政教分離のお題目を何処までこの市場で通用させることが出来るかは見どころではあるものの傍観するわけにもいかずだ……アウトバウンド・ハラルにしたところで、農水、経産も結局のところ、道はつけたあとは民民でやってくれのスタイル。アウトバウンドは主権元のガバナンスが否応なく機能

している。一方で、インはこの通りだ。ホスト国が政教分離を掲げている以上、出来ることは限られている。ましてや観光庁さんも旗揚げまだ日が浅い。荷が勝ち過ぎといったところだろう。にしてもだ……観光庁ヨ。あんたたちの組織はプロパーの役人はほんの少数。それも各省庁からの寄せ集め。今回のセミナーだってハンドリングしたのはJ〇Bあたりからの出向組が関の山。当然と言えば当然の結果に過ぎないわけだ。ただこの後を考えると認証団体の姿勢如何によっては観光産業事業現場は大いに混乱、そして混乱を深めることになるだろう。ハラルだけではない。この後に来るのがベジタリアンでありヴィーガンでありコーシヤだ。凡てがライフスタイルとイデオロギーから派生した国際社会によって担保されたルール。観光行政、インバウンド行政最後発の国である日本にとっては難しい舵取りが迫られるだろう。今のうちに後から出て来るモノを含めたグランドデザインと交通整理の考え方は持つておくべきなのだが……】消え入る前の最後の足掻きか。ポッポッポッと音を鳴らし乍らストーブの灯も堕ちはじめる。2月のうすら寒い部屋の片隅。隆二の眼は消える寸前のストーブの灯を見つめたまま動かなかった。

2013年当時、日本に在住するイスラム教徒たちは23万人程度と言われていた。※2024年末の時点における日本在住イスラム教徒は42万人と言われている。これは日本の総人口に占める割合でみると0・3%だ。2023年度との比較では約7万人増えていることになる。

20年前と比べると約4倍弱。この傾向は日本国内の労働力不足に伴う外国人受け入れ施策でもある技能実習生らが増えていることも要因の一つにもあげられる。

国・地域別で最多はインドネシアの約20万人、バングラデシュ約3万5千人、パキスタン約3万人、マレーシア約1万2千人、トルコ約8千人となっている。

尚、イスラム教徒にとって最も大切なモスクの数だが、25年7月時点で全国に約160カ所存在している。

#### ※印巻末で出典記載

さて、ここで一寸乱暴な数字を導き出してみようか。

42万人のうち、28万5千人の人々が先にあげた主要国から受け入れたイスラム教徒、ムスリムたちであると考えたとき。残りの13万5千人のチャネルについて考えてみて欲しい――。

そしてもう一つ。イスラム教という宗教の性質上、家長がイスラム教徒である以上配偶者もイスラム教徒にならなければならないという定めがある。同時に、夫婦間において生まれた子供たちも自動的にイスラム教徒として生きて行くことが定められている。

さて、これらから導き出される一つの答えとしては、今後、爆発的にイスラム教徒が日本の中にも増えてゆくという構図が見えてくるのである。

地元コミュニティにイスラム教徒の家族、小規模コミュニティが根ざして生活をする場合。近隣の住民も宗教的なルールに乗った生活様式であるとの理解を示すことは可能でもあり、例えば、ハラルにしても「そういうものである」と理解することも可能なのだが。

問題は情報が届いていない、足りていない地域のコミュニティにイスラム教徒が入って行ったときのアレルギーであり市民感情、市民反応に対する処し方の難しさという側面も垣間見える。

例えば図2をご覧ください。



図2は、ハラールであることをイスラム教徒にわかりやすくするための表示だが、現時点においても日本人のどれほどの人たちがこの意味を理解しておられるかは疑問なところでもある。

先進各国の政府系機関には「ハラール」に取り組むためのオフィシャルでありアライアンスでありの棲み分けは別としても政府系がバナンス機関が存在している。この動きはCODEXにおいて、1997年にハラールとコーシャの存在が国際的に「認知採択」されたところから始まっている。

しかしながら2013年時点にしてなお日本は「民民」という姿勢を崩せずにはいたのである。

「餃子屋かよ」 セミが鳴くには半年早いつて云うんだよ」



各国のハラールマーク

### 図3 主要国の国家的ハラールオーガニゼーションマーク

※インドネシアのマークだが、インドネシアウラマー評議会(MUI)の主幹事業であったハラール認証制度とハラール資源の管理等が、2019年にBPHH(宗教省大臣直属機関・ハラール製品保証庁)が新たな事業移管先となっており、これに伴いロゴも変更となっていることに留意してほしい。



隆二の考えていた通り、観光庁による日本初のイスラムツーリズムセミナー以降、制度者(国内のハラール認証機関)はもとより、各種事業現場、コンサル事業現場は蜂の巣をつついたような状況下に置かれていた。

2013年春……そのような状況下の中、外務省外郭団体である「日本アセアンセンター」からのイスラムツーリストを受け入れるための後方支援がはじまった。

それが「イスラムフレンドリー」という概念だったのである。国内事業者、国内のインバウンドに取り組む地方自治体はこれで一気に「イスラムフレンドリー」へと雪崩を打って取り組み始めることとなる。制度者達の反応は様々だった。

「ハラールにイスラムフレンドリーなどは通用しない。有り得ない」とハラールの担保性を重要視する認証機関たち。逆にイスラムフレンドリーという言葉を商機と捉え、「イスラムフレンドリー認証」という認証化に取り組む認証機関たち。中には、イスラムフレンドリーは駄目だと言っていた舌の根も乾かぬうちに宗旨替えとも思える「イスラムフレンドリー研修」なるコンテンツを創り出す認証団体もあった。イスラムでもないのにハラール認証を仲介するブローカー、そしてコンサルタント達。その様子は差乍ら玉石混濁、百鬼夜行を往くと隆二には映った。\*\*\*

ハラールは、いや「認証」という制度は、「政教分離の国」日本という中で一気に混迷を深めて行くことになるのであった。

この状況に業を煮やし危機感を感じた隆二はここで4つの動きに打って出ることになる。

・まずは、国内に見られる認証機関の存在をブラッシュアップすること

これは、誰も手をつけていなかった。理由は「センチティブ」さが機能した結果だった。観光庁の一つの躓きでも分かるように、国内の認証サイドからのアレルギー反応が予想できなかったことによる二の足を踏んだ結果が顕れていた形だ。

・取り組み上の得られる果実の大きさと伴うリスクのブラッシュアップをすること

残念ながら日本は「無知」すぎた。知らな過ぎたのだった。日本という国が先ごろ声を上げたイスラムツーリストを受け入れるまでの、国内に在住するイスラムたちの生活の有り様を何も知らなかったのだ。長らく続いた氷河期が、一転して陽が昇り、光が射す。光を浴びた者達に目は行くが、そこには必ず影が付き纏う。闇夜であれば影は目立たぬ。しかし、この国は「影」に対しても無知過ぎた。



・国際社会のハラルの存在と位置づけ

光りが当たれば影が出来るのも真理の一つ。持て囃されればネガティブな側面も必ず出る。情報が無かった。日本にはそのネガティブな側面をわかりやすく開示、可視化するシステムが機能していなかった。選別は果実とリスクの相互バランスによって機能を見ることは当然であり、良い話ばかりが出回ること  
は将来に観る「脆弱」さを意味していた。

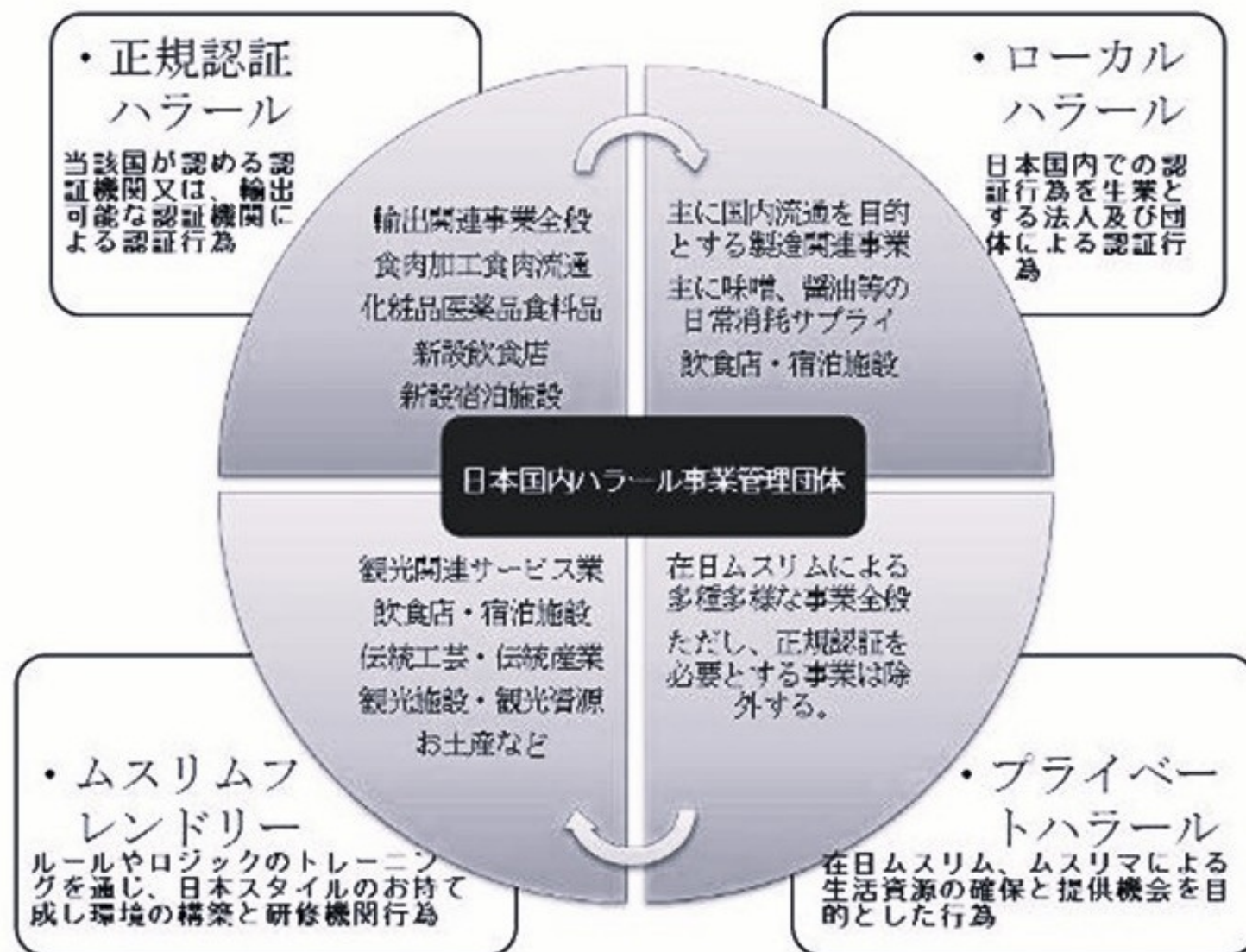
「さて、わたしが取り組むべき目先のことは理解もできたものの。立ち位置が決まらない。そもそも日本という国は何故「政教分離」へと舵を切ったのか。まあ、イスラム教徒いう宗教が日本に入るのが遅かった理由は陸続きでは無かったこと、そして鎖国があったこととして理解できるが、さて、近代日本に至って政教分離のそもそも理念とは如何なる考えによって始まったのか」そう隆二は悩んでいた。政教分離がこの国の政治に齎す功罪。

「そうだ、ついでだからもう一つ調べておくとするか」

・日本の宗教、宗派におけるハラルとの関係に関する調査

日蓮宗、創価学会、天理教、神道、凡そ調べが付く日本の宗教と宗派にとって、イスラム教のハラルは日常生活に取り入れることは出来るのか否か。

これを調べることは隆二にとっての立ち位置を考える上で重要なファクトだった。



さて、混迷を深める「in」の制度設計に観た日本の宗教への取り組み。

隆二は「in」の確かなコンテンツ造成を進める上で、アウトバウンドハラルロジックを纏め上げた  
○○大学教授の○○氏の意見を聞くために連絡を取り付けた。

「先生、突然申し訳ありません。先日メールで申し上げた通り、わたしの師匠でもある田崎より紹介を受け連絡をさせて頂いております。お時間は大丈夫でしょうか……」

「あゝ、はいはい」と○○氏の対応はとても柔らかく、所謂、五月蠅がられるものではなく隆二はホッと胸を撫で下ろすに至っていた。

「早速ですが、先生。教えて頂きたいことがあるのです。他でもないのですが、観光庁をはじめ日本アセアンセンターさんなどの動きも活発となって来ているのはご承知だと思うのですが、一方で、国内の在日ムスリムサイドから認証行為でありサービス行為に対する様々な声が上がりに出し、混沌とし始めている状況。先生、この辺りについてご指導いただけませんか」隆二は口に出す言葉一つ一つを今までにないほど慎重に選び言葉としていた。

○○氏の言葉は柔らかく、尤もなものとして隆二は始末をつけるより他は無いものだった。○○氏は愉快そうに一つ笑を挟むと次のように言葉とした。

「松原さん……それは、inは松原さんにお任せします……」と。

隆二はこの遣り取りを終わらせると己の愚かさ、○○先生の懐の深さに一層の感銘を受けていた。  
「本来、○○先生のような人が制度設計に関わってくれればと説得力も増す。俺が声を上げたところで、精々がどこの誰よというところからの聞きだろう。が、○○先生がinの制度設計に手を出さないことは当然のように理解できる。政教分離の国にあって他国の宗教を国内に取り込み、制度を作り上げようとする方がどうかしているのだ。まして、相手はイスラム教。教義教則は多岐にわたる。宗派でさえ何派にも枝分かれする。それによって教義教則は変わるのだ。○○先生の仕上げた仕事はマレーシアスタンダードと云われるハラルへの確かな入り口構築。まあ、JAKIMの場合は相互認証制度が機能している国も少なくない。マレーシアスタンダードのロジックを身に付ければ、日本としても、インドネシア以外のASEANは市場化できる。しかし……先生は俺にお任せしますと云ってたよな……どゆこと。まあ、事前にメールでご挨拶だけは済ませておいたから、事前情報は取れていると思うのだが……、お任せする……かあ」

隆二はこの時点で既に幾つかのルールを自分に課してホームページをはじめブログなどを通じ発信をし

ていた。

- ① 宗教や認証行為で金品の授受をはじめとする商行為は行わないこと。
- ② 宗教と信仰を持つ者達に対する配慮を大前提として取り組むこと。
- ③ 大義は国益。目先の利益に追われ誘導せず、国益に通じる取り組みとすること。
- ④ 全方向的耐性を持った発信、取り組みに終始すること。
- ⑤ ハラールに捉われることなく、数年先を見据えた有り様を切り口とすること。
- ⑥ 清濁を併せ吞みつつ己の立脚地を見失うべからず。と。

しかし、隆二のルールが世間に通用するはずもなく、制度者達による様々な都合は、市場を、事業現場を混乱に貶め、終いには輸出も出来ると言いながら輸出もできない。これじゃあ国際社会には通用しないという声も上がり出す始末。一方で国はinの制度設計に関し「民民」という錦の御旗を下ろすことは出来なかった。政教分離という基本的政治姿勢と国政への取り組み。

「この姿勢が今日の日本をここまで守ってきた。国民をここまで守ってきた……しかし、有体にいうなら、臭いものには蓋。現代の鎖国とも映る。一方で、いいとこどりを得意とする人間たちの温床ともみえる」

隆二は早々に4つの動きに打って出たのだが、その際、一番最初に手をつけたのが「国内認証機関のブラッシュアップ」と日本の各宗教団体のイスラム教・ハラールへの日常生活における取入れの可能の是非についてだった。

#### 図4 参照

隆二は日本で初めての「国内のハラール認証団体等展開図」を仕上げリリースをはじめていた。これは日本における在日ムスリムをはじめモスクが中心となるハラール認証団体を体型的且つ、一目で判断の付くわかりやすいものとなり関係者間の評判も上々……ではあったのだが、ある日一本の電話が鳴る。

「理事長、大変ですよ」理事長が作ったコンテンツがパクられてますよ」偶々申し込んでいた〇〇のセミナーに行ったんですけど、映されていたパワポのデータや展開図、コンテンツまで丸パクリでしたよ」これ、著作権侵害で訴えた方がいいんじゃないですか」との知らせが齎されたのである。

これを契機として、隆二の所で作り上げたロジック、コンテンツは何度も何度も様々なところで盗用されることになる。その度に、隆二のもとにはご注進を齎す者たちがいたのだが……。

「全くしょうがねえなあ。使わせてくださいと言ええば済むのに。コンサル系の看板挙げてる連中にとっては、それも言えねんだらう」これが隆二による常なるスタンスだった。後に、驚くことに隆二自身がスピーカーとして登壇したセミナー現場の二つとなりのブースで、丸っパクリのコンテンツを隆二自身が目にするようになるのだが、それでも隆二はそのブースの担当達に文句を言うことは無かった。

考えようによっては……というまでも無く、隆二にとってはロジックであり作り上げたコンテンツは「経営資源」であると考えるのが当然だった。しかし、この時に隆二が考えていたことは、

「俺が作るものは国の経営資源にならなきゃいけない。だから、パクリたきゃパクれ。そして使えるものなら凡て使え。そして広めてくれ。この考え方を……」と、一人で出来ること一人で広められることの限界を見越し、寧ろ周りの力を使い広めることを考えていたのであった。

「本来、制度設計に力を尽くそうと考える者は一纏まりになったほうが強さは増す。しかし、この時期は覇権争い喧しく、離合集散は当たり前。ともすると足の引っ張り合いは日常茶飯事だ。何かを云うことは簡単だ。ただし、それが俺の考える国益に結び付くかと考えたときそうは為らない。ロジックやコンテンツ程度の共有は腹を太く見てみぬふりとしようじゃないか。分かる者たちには判る。それでいい」と肚を括っていたのであった。

この頃には隆二の仕事を進める上での立脚地も決まっていた。

それは日本の各宗教団体へのヒヤリングを通じての結果がそれを容易なものとしていたことは確かだった。

「恐れ入ります、創価学会さんですか？」 恐縮ですが広報ご担当に電話をお願いできますでしょうか。松原と申しますが」

「どの様なご用件でしょう」

「はい実は、イスラム教のハラールと云うものをご存知でしょうか？」

「はい。それが。」

「創価学会の信徒の皆さんは、ハラールと云うものを摂取可能なのでしょうか？」

「………ノーコメントで」

「天理教さんですか？」……… ハラール………」

「ノーコメントで」

「神社庁さんですか？」………」

「ノーコメントで」

この現実を目の当たりにした時、隆二の頭の中には「政教分離」に進んだ近代日本の政府の覚悟が見えた気がしていた。

「政教分離というものを、俺はお題目程度に考えていたのかもしれぬ。いや間違いなくそう考えていた。しかし、この現実はどう考えるべきではないのだろう。

調べりゃ出てくる仏教徒人口1億人強、神道人口1億人強、合計で2億人という、日本人口ですら平気で上回るこの国のブワブワな宗教観。結局、近代日本政府の目指したところは一人の国民も漏らさぬ平等の有り様というこでしかないだろう。国民の「宗教観」を顕す数字を見る限り、ブッチャケ宗教と

信仰に向き合う国民の状態把握は意味をなしていない。

バカバカしいただの数字ではない。

政府が「水も漏らさぬ」制度政策の有り様を求めた結果の政教分離。であるのなら、それに基づいた国民の選択が機能する仕組みづくりこそが是。ここからしかあるまい」と考えていたのである。

「しかし、各宗教団体のノーコメントという回答を見るにつけだ……選択の機能とは言ったものの政府サイドの制度設計側に身を置く人間でもなし、具体的なやり様、実現性のあるやり様というものが浮かばない……。たとえば浮かんたとして国や社会に対する影響力や如何にと考えると……ハァ、これはやはり学校だけはしっかり出ておくべきだったのだろうなあ……50で思い返してみたとして時すでに遅し。挙句にここまでの生きすがら受けてきた矢玉鉄砲傷も深すぎる。善因善果悪業悪果。それもこれも自分の責任。さて……俺……どうやるよ」

風雲急を告げる日本による宗教への取り組み。

国際社会より遅れること20年。

日本は何を、そして、どこを拠り所として行くべきなのか。

隆二の挑戦は今始まったばかりだった。

■

隆二は高校を2年の終わりに中退していた。学校からは随分とめられた。進学予定者の中には入っていた隆二を学校側としても「進学率」を少しでも落としたくはなかったようだ。

校内での喫煙や、友人の下級生へのカツアゲに付き合い、2年時には3度の停学処分。それでも3年には進級出来る前提があった。しかし進学が前提に無い者に対して学校側は厳しかった。ホームルームの出席が一限足らずだけで留年を宣告される者もいた。

隆二は世界史か英語の高校教員になることを漠然と考えていた。

「爺ちゃんのこと考えたら歯科医を継ぎたい思いもある……だけど、うちにはそんな大学行けるような金はない。まして、非嫡出子の子供。それも一番孫。婆ちゃんがオモシロイ顔をするわけがない。精々、学校の先生か……」しかし……

世界史の担当教諭などは隆二のノートを目にすると授業後に職員室へと呼びつけた。

「隆二、お前のノートはどうなっている。わたしの授業、黒板に書きつけたことが殆ど書いていない。それぞれが一つのに掘り下げていることは認めるが、これじゃあテストの点数が取れない。ノートに免じて赤点は出さぬが、黒板をうつすようにしろ。これがやりたきや大学へ行ってからだ」とのご託宣。が、ここからの世界史の先生の隆二に対する目は、覚え目出度きものと化していた。

英語のグラマーの教諭などはある種の嫉妬をみせ。

「隆二、おまえどうなってるのよ。リーダーあれだけの点数取れるのにグラマーなめてんのかよ。ある意味、カンニングしてのリーダーの点数ではないことは分かる。だったら、なお更グラマーもっとしっかり勉強しろよ」隆二は1年生の二期の中間テスト以降、リーダーは85点以下は取ったことが無かった。一学期目は二度とも「赤点」だった。そこから英語にのめり込む。

地学などほとんどないことになった事がある。全国模試で学年一番になったのである。奇跡だった。

「このクラスに、1組から9組迄の中で学年一位を取った者がいる。今から答案用紙を返すが、点数の低い順に返す。名前を呼ぶから取りに來い……」

この高校には特待生クラス「アップパー」という10組目が存在した。このクラスの者達は有名公立高校の受験に失敗した者たちだけで構成され、授業料免除という免罪符が与えられるのである。1年時から2年時への進級の際、成績優秀者はアップパーへと組み込まれるシステムもあったが、残念ながら隆二はそれには届かなかった。寧ろ届きたいと思わなかった。週で7時間も授業が増えるのである。

隆二の名前は中々呼ばれなかった。

次第に「おめえ、何で呼ばれねんだよ」という声が隣近所から届く。

「最期！ 松原！ ……」

名前を呼ぶ先生の首が不思議そうに傾く。眼は明らかに奇異なるものを見る目の色を宿していた。

「どうしたんだ、お前これ……」

「……知らんよ」

マークシート方式だった。隆二は「鉛筆転がし」で地学を70点以上取っていた。寧ろ自分で考えた処の正解率は低く、鉛筆転がしが奇跡の正解率をよんでいた。

「松原、チョット來い……まあ、カンニングは……してないよな。そういう話しは聞いたこともない。地学好きなのか？」

「別に……なんか地味でしょ？ 地学って」隆二がそう告げると担当教諭は何も言わず帰って行った。後ろ姿からは何やら寂しさが漂っていた。

が、そんな凡ては水泡に帰し、隆二はあまりにも早すぎる人生経験、修行をつむこととなる。

思いもよらぬところで狂った人生の歯車。結局、隆二は一生「コンプレックス」という余計なものを抱えたまま社会からの逃避に向き合うことになるのだが……。

隆二が中退した理由は大きく四つあった。二つは隆二がはたらいた「不逞」に起因する。一つは隆二の家庭の経済的困窮により学校に納める授業料ですら滞る有様だったこと。隆二もバイトをしながら時おり授業料の足しとしてはいたものの、経済的困窮改善の方向は見られなかった。

最後の一つが寧ろ中退の決定打となったことは、後の隆二の異性関係の乱雑さ煩雑さいい加減さに大きな影響を齎したようだ。隆二は17歳にして知るには余りにも衝撃的な人間の持つ一つの側面を見るに至る。「どうして言うかなあ」隆二が不逞をはたらいした相手から齎された一撃。

隆二は不逞をはたらいしてしまったことを当時付き合っていた同級生の女の子に告げてしまっていたのである。純粹過ぎた。馬鹿正直すぎた。苦しすぎた。顔が見ていられなかった。悩みに悩み隆二は当時の彼女にそれを告げたのだが……不逞相手が悪かった。

相手は、付き合っていた女の子の一番の親友だった。

隆二は不逞相手にもそれを告げたことを伝えていた。

「どうして言うかなあ」

その時のひと言がこれだった。

隆二はこの一言を耳にした時、間髪入れず学校をやめる決心をすることになる。

「あゝ……駄目だ。これは駄目なのだ。失恋に落ち込んでいる相手、俺はけしてその淋しさに付け込んではいない。ただ、おかしい高揚感とへんな期待があったことは事実だ。でも、結果的にはなるように……なるべくしてそうなっただけ。ましてあいつも処女だった。どうして言うかなあゝって、おい。百戦錬磨を相手にしたのかよ俺。駄目だ。無理だ。整理がつかない。これは俺の居場所が消し飛んだ瞬間なんだ。しかし、これが人間なのか。これが女という生き物なのか……」隆二は中退を決意した。

後に隆二は次のように述懐する……

【あの時、結果的には中退を選択したのが間違이었다とは思う。結局、俺は逃げ出したに過ぎなかった。楽な方へと。そのことによって俺の思考は完全に閉ざされたからね。考えることを放棄したんだよ。女なんてそんな生き物なんだ。言わなければ無いと同じ。言った者が悪い。『やった』前提は消し飛んじまう。ただ一つ、俺の選択が後の『あいづら』の関係修復の薬効となったであろうことだけは僅かでも期待は出来るのかもしれない。そりゃあそうだ。あのまま俺が学校に居てみる。そして俺がそれを両方に告げないでいてみる。高校二年生で体験するには金払っても体験できないようなエンターテイメント。修羅場を観ることになっていたかもしれない。まあ、これも人生経験と割り切ることが出来れば、もう少し利口になっていたかもしれないのだがね】と。

松原隆二、十七歳の冬は春の訪れを想像するには余りにも身も心も冷えすぎでいた。



## 第三章 起動

隆二の躰は関西広域自治体（仮名）連合本部内の応接室へと通されていた。

ここで少し関西広域自治体連合について解説を入れることとしよう。

設立は2010年。関西圏の自治体（県・府・市町村）が結集し、当該エリア内において直面する様々な課題に向き合い、東京一極集中で進められてきたこれまでの様々な制度政策を分散し会員自治体をはじめとする地域の活性化に資することを目的として旗揚げされている。

取り組みの骨子としては次に示すようなものが代表的となる。

- ・防災力
- ・産業力
- ・環境保全力
- ・広域自治力
- ・文化力

隆二の計画であり考えはこうだった。

「このイスラム、ハラールという文化は必ずや近い将来日本の産業上大きなウエートを占める時代が来る。現在みられる混乱はその時代を前にした通過儀礼のひとつ、綱引きの一つの頭れと云うことでしかない。国が変わる時、変え手は常に外からやって来るものだ。そしてその外からの手が入らぬ限り国と云うものは動かないのだ。それは今までのこの国の歴史が証明している。インバウンドという観光にしても同じことが言えるだろう。邪魔くさいという声が喧しい中、日本は観光立国宣言を発し、観光立国推進基本法を發布した。これは有体に言えば外からの観光客、Touristが日本を変えたのだ。当然だろう。アイデンティティー・イデオロギー・ライフスタイルが多岐にわたるインバウンド市場に取り組むうえで、従来のマスツーリズムという業界のご都合主義が通じるわけがない。旅行会社の旗を高く掲げたその後ろ……、今時そんな旗の後ろを歩くのは、日本人と台湾人と韓国人ぐらいのものだ。旗の後ろを歩くのは上手だが、旗が無くなった途端に路頭に迷うのが関の山、自由行動となった瞬間に脚はお土産屋さんに向かうぐらいのもの。

しかし……まだ日本人は知らない。宗教と信仰を持った人々が旅に出たときどの様な行動形態をみせるのか。知っているものはまだほんの僅かだ。まして、ハラールへの取り組みに歩を進める者達はハラールしか見ていない。人間を見ていないのだ。何故、ハラールへの取り組みが必要なのかと考えたとき、その答えはイスラム教だからという答えしか持っていないだろう。

俺は違う。俺はハラールをTourismの構成要素の一つとしてみている。あご・あし・まくらと唄われた観光構成要素の三大資源。食事・移動・宿泊。彼らにとっては全ての全てがハラールであることが求められる。これまではホテルのナイトテーブル、あたり前のように置かれた聖書。しかし、これからはこれに代わってキブラマークが必要になるだろう。むしろ信仰によって部屋は変わっていても不思議はない。予約時に「信仰」を確認するリファレンスレターが出ることさえ考えられる。風呂に至っては、大浴場に裸で他人と入るなど言語道断だ。これからは部屋付きの露天風呂や部屋付きの外湯が要求されるようになる。食べるものは云うに及ばずだ。イスラムという宗教そして信仰は国が丸ごとイスラムとして成立している。社会インフラ・公共インフラ・様々な生活資源。

現に見てみるがいい。マレーシアやインドネシアから来るツーリストの鞆の中を……一度でも豚が触れた皿は使えぬとのことから、紙皿を大量に持参し、スプーンフォークは云うに及ばずコップの果てから持参する。コンビニでは紙皿や簡易式のフォークナイフが飛ぶように売っていると聞く。経験者に言われて来たのだろう。ハラールカップ麺を何十食と持参するに至っていた。この現況に鑑みるに、観光・Tourismという入り口から資源造成に取り組むことが一番の近道なのだ。行政機関。それも大きな画を書くことが出来る行政機関。ここを墮とすしか道はない」隆二はそう考えていた。

隆二の前に座ったのは関西広域自治体連合の事務方ナンバー2の「林」だった。少々わざとらしくもあり、大袈裟な男と映った。隆二の言葉に大仰に驚いて見せる。ただ、問題意識の高さと付加価値意識、観光という切り口に対する意識は過去一番高かった。

「松原さん……松原さんは何故、イスラムをやりはじめたのですか？」

「イスラムをやりはじめた訳ではありません。イスラムはその他大勢の一つに過ぎません。この後、日本はユダヤ教から派生したコーシャをはじめヴィーガン、ベジタリアンという国際社会では普遍性を伴うコンテンツの襲来に直面することになるでしょう。そういう意味においてイスラムは切り口の一つ。寧ろ、総合的受け皿を構築する上で避けては通れないコンテンツの一つに過ぎないと考えています」

「その基づくべき根っこが観光……ツーリズムということですね。」林は天井を見上げながら思案にくれるように指を唇に当てていた。

「松原さんはお幾つですか？」きた……隆二は思った。次は出身地か……

「松原さんは東京の方ですか？」ビンゴだ……った。

「独立されるまでのお仕事は？」まあ、3大要素を一つずつ……

めんどくせえ……この通過儀礼を通らなければ仕事にならぬのである。

一つ云うのなら「はい、東京出身です」これをやった瞬間に会話は終わるということを嫌と云うほど隆二は潜り抜けてきた。

【膝を乗り出させるためには……】

「ええ、出身は小樽なんですがね、就職は東京の旅行会社でした。独立は関空の開港に合わせて大阪で

独立したのですが……独立して年明け早々阪神淡路大震災。鳴かず飛ばずの3年間。地べたを舐めるような生活をしていたのですが、やっとなんとか……」

小樽という言葉の響きはどこか郷愁を抱かせるものがあるのだろう。小樽という言葉聞いて顔つきが緩まぬ者はいなかった。これは住んだことの無い観光客なればこそその目線でもあった。

【小樽の怖さを知るまいよ。どれ程排他的な地域性であるのか。外からの者に対する冷たい目は大阪の比ではない。まあ、非嫡出子とはいえ小樽の〇〇の坊ちゃんと云えば小樽で一目二目置かぬ者はいなかったのだが……】

どの道この時点で直ぐになんとかなる話ではなかった。ましてこの時は隆二をわかりやすく示す実績も無かった。隆二は此の期においも丁寧な情報発信と小さな関りを一つ一つ構築してゆくより道は無かったのである。

2013年の夏に隆二が関西広域自治体連合を訪れた後、日本は急速に宗教派生因子の一つでもあるハラルへと向けての動きが活発化しだすのだが、この時点においてのこの存在はおおよそ不確かでありブワブワな存在。寧ろ『言った者勝ち』という切り口ばかりが際立っていた。

と同時に、隆二のもとにも人が集まりはじめていた。中でも一番早くに合流したのが「影山」だった。中東のキャリア、航空会社の日本支社勤めを経て大学の教員を目指し長きの浪人生活を経て隆二の研究所に合流。出合いは2012年の学会でのことだった。当時影山も大学教員としての「実績」に乏しかったこともあり、なにかそれらしい看板・タイトルが欲しかったという思いが働いての合流。隆二にしたところで、我が身を振り返った時の「重石の重さ」は明らかな勘目足らずだった。

「影山がうまい事大学教員でもなってくれたら少しは重さも増すだろう」そう考えていた。

後に影山は研究所の非常勤の役員理事を務めながら四国の大学の助教の席を射止めている。それからだろう隆二の動きにも俄然とスイッチが入り、様々な活動へとシフトする。

中でも重要視していたのが「ブログ」での活動だった。絶対に書くことをやめなかった。兎に角毎日書き続け、ハラルやムスリムフレンドリーを含めた国際社会における存在が担保された「資源」の切り口と考え方、そしてベーシックについて書き綴っていた。

例えばである。国際社会においてツーリズムのコンテンツの一つに『Religious Tourism(宗教ツーリズム)』というものがあるのだが、これは聖地巡礼に留まることなく信仰を持った者たちによるツーリズム、ある種のアイデンティティーとイデオロギー、ライフスタイルに裏打ちされた旅を総称して云うのだが、国際社会においては普遍性を保った旅の「造成」機会の一つでもあった。

ここで申し上げる「造成」とは機会提供側と理解してほしい。

常にご利用側と提供側という目線を持ち、どこから考えるべきかというのが隆二のポリシーでもあった。そのReligious Tourismのサブコンテンツとして存在していたのが『ハラルツーリズム』というセグメ

ントである。

これは、イスラム教徒の教義戒律に特化しイスラム教徒の信仰を守るための考え方であり、絶対的な基づく場所であった。名だたる国際会議の席上、OICの席上、WTOの部会会議の席上使用される言葉は「ハラールツーリズム(HALAL Tourism)」という言葉だった。

しかし、今から12年前にしてなお、ウィキペディアには(HALAL Tourism)とある言葉は出てはいないものの、定義づけは置き去りとされていた。

ここで隆二は一つの問題点を見つけるに至る。

「ハラールツーリズムという言葉自体、ハラールという教義に基づいていることは理解できるから問題は無かるう。しかし、未だに確たる定義づけを見ないということが問題でもある。センシティブさが機能しての及び腰と理解は出来るものの、これはある意味、市場拡大の損出も意味する。他方で、ムスリムフレンドリーとなった時はどうだろう」と。

「ムスリムとはイスラムという信仰の民を指す言葉ではあるが、フレンドリーとは何なのだ？ 名詞として使われることもあるが、寧ろ、形容詞・副詞としての存在感の方が高くは無いかな？ 言うなればイスラム教がシャリアの中でいう所の〈偶像〉に近いものではないのか。およそブワブワとした存在。フレンドリーなど彼らの信仰から行けば、偶像そのものだろう。だから国際社会においてはムスリムフレンドリーなどという言葉は使わないのだ。ムスリム旅行者の多いムスリムヘブンと云われるオーストラリアを見てみるがいい。そんな言葉は使っていない。切り口は「ムスリム専用」〈ハラールオンリー〉〈ハラールツーリズム〉だ。それが、日本での取り組みが始まったとたんにムスリムフレンドリーが横行し、さも宗教的概念、ベーシックのように都合よく使いまわされる。これは今のうちにムスリムフレンドリーを、受け入れ側のホスピタリティーの一つとして定義づけしておく必要がある」と考えたのである。

日本アセアンセンターが使い始めた「ムスリムフレンドリー」ということば。残念ながら日本アセアンセンターも政府機関の一部。民民の取り組みが基本路線であるところの「宗教」の前では、この言葉をそれ以上強く打ち出せる立場は無かったのである。

動き出してはみたものの混迷はなおも続いていた。

そんな中、2013年の暮れにとある団体の担当者からの問い合わせオファーが隆二のもとに齎される。一般社団法人日本効率協会(仮名)だった。もともと経済産業省が所管する外郭組織の一つだったはずだが、組織の再編などから一般社団化していたはずである。

この組織が毎年3月に開催する「インターナショナルレストラン・ホテルコンベンション」(仮名)でのムスリムフレンドリーに関するセミナーへの登壇依頼だったのである。

明けて2014年3月、隆二は初のオフィシャルな場での「考え方」を話す機会を手にした。

\*\*\* ◆昨日は大変失礼いたしました。今日、今年最後のお墓参りに行くためにあれやこれやと準備をしたり、大掃除をしたり、ワチャワチャしておりましたので飛ばしました。  
さて、では書いて参りましょう。。。\*\*\*

2014年3月、隆二の躰は一般社団法人日本効率協会(仮名)の主催する「インターナショナルレストラン・ホテルコンベンション」(仮名)のセミナー会場壇上に在った。聴衆は170名を超えており、満席だった。隆二にとってはこれ程の聴衆を前に「アジル」ことは初体験だったのだが、この男、上がることを知らない。寧ろ、人間が増えれば増えるほど熱がこもるタイプでもある。

そもそも、旅行会社の添乗員生活が長かったこともあり、元来、人前で喋ることを苦にするタイプではない。寧ろ、5分黙っていると口が疲れてくるタイプと自ら言うほどの喋り好きではある。なにせ、ツアーに乗務していた「バスガイド」を自分のバスから下ろし、自分がマイクを握ったまんまツアーを進めたという逸話があるほどだ。平時からマイクを持つ時間が長い添乗員ではあった。

ただ、このセミナー「失敗できない！ 絶対に失敗できない！」という思いは強かった。  
それはそうだ。

スピーカーには、ハラール認証団体の代表者も招かれており、ハラールを体系的に解説し「認証が必要」「認証の重要性」を中心に話しを進める。ただ幸いにも認証団体のスピーカーが話するのが最初だったこともあり、隆二は相手の出方・方針、攻め手を確認することが出来たこともあり、自分の話しに必要なこと、不要なことを反映することも出来たことは幾分の余裕も持つに至れたようだ。

パワポの資料を使いレーザーポインターを操りながら話をすすめる。

主題であるところの「ムスリムフレンドリー」の持てなし側の本来あるべき基づくべき姿勢については力を入れて話しをした。しかし、隆二が最も力説したのは\*\*「選択の機能が働く仕組みづくりの重要性」についてだった。

鰻が流通すれば中国産が〇〇県産表示とされ店頭に並ぶ。餃子が流通すれば中国製が北〇道自社製品と表示され店頭に並ぶ。日本の製造と流通現場の脆弱性に触れ、「ハラール」で同じことが起きることは国際問題化する恐れについて説いた。

国際相互認証発給団体、ローカルハラール認証発給団体、プライベートハラール取り組み事業、そしてムスリムフレンドリーの立つべき場所。

同時に、消費者が「宗教」を裏付けとした製品を知らずに手にすることへの危険性については時間を割いた。様々な宗教がある日本。当然教義教則ルールも多岐にわたる。

他の宗教のルールのもと加工されたものが摂取できない宗教があることも当たり前のことでしかなかった。もっとも問題なのは、それが隠され消費者が知らぬうちに手にする危険性こそ避けなければならぬ状況だった。

巷では、ハラールを巡って様々な声が上がっていた。それもこれもハラールを広めようとする「必要と

する側からの声」であり、「商機と捉えたブローカー・コンサル系」からの声を中心だった。ある時などは「商機と捉えたブローカー・コンサル系」と某自治体の取り組みからは「ハラルを食べて健康に!」「ハラルを食べて綺麗になろう!」などとする取り組みが目につき始める始末。

隆二が最も恐れていた事案。広めるためには何でもあり。言った者勝ち。自治体からの事業予算を勝ち取った取り組みこそが是。最早、混乱ではなかった。そりゃあそうだ。先導者が意図的にそういうモノを市場に投下するのである。シツチャカメツチャカである。

「端的に申し上げるのであれば、必要とする人がおられると同じく、必要とすることが出来ない国民も居るのです。まず大切なのは、ハラルに対する正しい知識を可視化すること。そして国民が選択の権利を行使することが可能な状況を作り上げることなのです。創価学会さんにも天理教さんにも神道さんにもヒヤリングしました。みなさん異口同音にノーコメントを貫いてらっしゃいました。皆さんはこのことからどう感じられますか?」隆二の論旨は明確だった。

必要とする者たちが当たり前に手になることが出来、必要とせぬ者、必要と出来ぬ者たちが手にしなくてはすむ制度、そして機会造成。これこそが消費者保護の精神であり、立ち場づくりであると。

隆二のセミナーが終わると沢山の聴衆が名刺交換に隆二のもとを訪れていた。結果は上々だった。ハラル認証団体の代表のもとへは隆二から名刺交換の挨拶に向かった。

「なにか言われるかな……」隆二はそう考えていたようだが、寧ろ、隆二の立場に理解を示し「イロイロナモノがデテキティマスカラ、コウツウセイリスルノモダイジナコトデス」と声を掛けてくれた。

あらかたの名刺交換が終わると、一人の女性が隆二のもとに駆け寄ってくると名刺交換をするなり……「理事長、うちの雑誌で連載原稿書いて頂けませんか」ときた。

その雑誌とは、週間「レストランアンドホテルズ(仮名)」という、レストラン、ホテルに特化した業界向けの専門週刊誌だったのである。

隆二は、この執筆を通じて後に隆二の研究所の理事となる「米沢」との縁を結ぶことになるのであった。

隆二のもとに届けられた連載のオフア―それは「1年間」隔週のものだった。見開きページ。およそ5000文字。ショートショート1本分に値する原稿だった。

隆二は持ちうる限りの知識を込めて書いた。そして時おり理事の影山にその執筆を回していた。

「影山さん、わたしが週間レストランアンドホテルズ(仮名)の執筆しているのは知っていると思うんだけど、良かったら何本か書いてみない? わたしも大変なものもあるのだけど、大学に出す研究成果や学外成果にもなるでしょう? まして専門誌だから観光学の分野でもあるし、大学からの評価にも影響あるんじゃない?」いざ書きはじめてみると、隔週とはいえ5000文字の原稿を書くのは大変な作業だった。

「あゝ、書きます書きます。学校側に出す学外成果で結構悩んでいたので助かりますから」そう言う」と期間中の4本ほどを影山がペンを担った。

「あと何本かは、師匠や相談役をお願いしておこう」これで隆二もだいぶと楽になった。

ただ、隆二は別に自分が楽になることだけを考えて振っていたわけではなかった。人間というものは外に見せる顔というものが誰しもある。その顔作りを手伝うのも自分の仕事だと考えていたのである。研究所の関係者たちは皆大学に関係した仕事を持つか、公共団体、公益団体と関係したポジションを持っていた。自慢することは無いにしろ、成果を求められることは当たり前前のポジションだった。

雑誌一本の執筆でさえ専門誌ということであれば成果は小さくは無かったのである。

ただ隆二。そういう神経を使えば使うほど自分の高校中退という事実を呪う思いが支配的になるのだった。【学校行けばよかったもう一度。高卒資格検定試験だけでもとって大学行けばよかった。大学行ったら俺はどうなっていただろう。多分弁護士か政治家にでも挑戦していたのかもしれない】と。

一般社団法人日本効率協会(仮名)の主催する「インターナショナルレストラン・ホテルコンベンション」でのセミナーと執筆活動以来、隆二のものには企業・公共団体からの講演依頼が次々に入ってきていた。

隆二はこれもスケジュールが合うようであればと、影山をはじめとする関係者に落していった。

そんな中、隆二は米沢という男と会うことになる。

切っ掛けは隆二が執筆していた週間レストランアンドホテルズの記事の中で見たホテルサイドの取り組みが目をついたのである。

「これは！ このホテルは早い！ 本来のあるべき姿を具体的に形にしている。一度話を聞いてみたい！ 原稿を書く参考にもなるだろう」と考えたのである。

米沢は大阪に本部・本社を置く老舗民族系ホテルの沖縄支社・ホテルの総支配人を務めていた。その後隆二からの電話では何度か話しを、まあ、取材のような形で話しを聞かせてもらっていたのだが、ある時の会話で、米沢が帰阪するという話しを聞いた際に会う約束を取り付けていた。

数カ月後のこと。合うのはこの日が初めてだった。

隆二は「流石」という言葉を反芻していた。

【流石名門ホテルの総支配人。伸びた背筋からは人間の素地。出来の違いが滲みだしていた。こんなものは太刀打ちできない。人間としての出来はもちろんだが、懐の広さ、誠実さ、真面目さ。そして質実剛健、泰然自若とした構え。これが一流ホテルの総支配人。こんな人に手伝ってもらえたら】そう考えていた。幸いというべきか、米沢は定年を間近に控えていた。

「この後、〇〇大学へ行くことは決まっていますが、時間も結構自由になりそうなので空いた時間は趣味のゴルフでもして遊ぼうかと……」

「米沢さん、空いた時間でいいのうちの研究所の仕事を手伝って頂けませんか？ 主にセミナーなどの講演活動とか、クライアントへのお手伝い、レクチャーが中心となると思います。そんなに沢山はありませんが、外部活動実績として書けるぐらいのものにはなると思います」

米沢が隆二の研究所に合流した瞬間だった。

次回12月13日18時前後の更新予定





---

小説『VANITAS』

---

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---